

えられる」(p. 207) といった記述もある。暴力のこのような論じ方からは、著者が次のような前提を持っているように思われる。すなわち、政治エリートは、権力闘争を生き抜く戦術として暴力が必要かつ有効であるか冷静に状況判断し、必要である場合にのみ暴力に訴える。そして暴力とは、必要なときに取り出して使い、不要なときはしまっておける、便利で安上がりな道具だ。このような前提である。上で述べたように、本書では紛争以外の暴力に関する記述が少ないため、著者が具体的にどのような暴力を念頭に置いているのか明らかではない。だが、誰にどのような暴力を行使させるにせよ、暴力とはそのように都合の良い道具であろうか。

評者が 2005 年にスマランやスラバヤなどの地方首長選を観察した限り、政治家がいわゆるごろつきと同盟を組んだ時点で、政治家がごろつきを利用するのと同様に、ごろつきも政治家を最大限利用しようと動き出す。選挙の際の協力の見返りとして利権を要求しつづけ、不満があればデモを起こす。彼らは、インフォーマルセクターの票の動員に威力を発するが、その動員能力は、いつ雇い主自身に刃向かう形で発揮されるか分からない。そもそも暴力が雇い主の道具に収まっている保証はない。暴力の担い手が、自身の利益のために動く可能性は常にある。このような側面を見るなら、暴力は、それがたとえ短期間の小規模なものであっても、必ずしも安上がりではないし、エリートが目的に合わせて管理・統制しながら利用できる手段とは言いがたい。

以上、いくつか残された課題はあるものの、本書は、三州の天然資源をめぐる利権構造と政治構造を非常に詳細に論じる一方で、それらの構造こそが暴力の有無を生み出すという大きな構図を描こうとしている点で、細部と全体構造との両方を包摂することを試みた価値ある労作である。評者自身も、暴力というテーマの難しさに常に頭を悩ませているが、著者の刺激的な議論は多くのことを考える機会を与えてくれた。インドネシア政治のみならず、天然資源問題に関心を持つ人々が一読すべき業績だと考える。

(今村祥子・大阪市立大学都市文化研究センター)

藏本龍介、『世俗を生きる出家者たち——上座仏教徒社会ミャンマーにおける出家生活の民族誌』法蔵館、2014、305p.

ブッダは悟りを開く道として、(必ずしも唯一の道ではないが) 世俗の生活を捨てて修行に専念する出家を説いた。この道は現在の上座仏教徒社会においても堅持され、多くの者が出家者の行動規範である律に従った修行生活を送っている。しかし、出家生活は世俗との関係を完全に断つものではない。出家生活を支える世俗社会からの布施をめぐっては、依存しつつも執着しないという中道的な立場が説かれる。但し、この道は「言うは易く行うは難し」である。現実の社会においては、出家者が安定的な出家生活のために世俗社会との結びつきを深くすると律の遵守が難しくなり、厳格な律遵守を目指す世俗社会との距離が大きくなり、十分な布施を得られないというジレンマがある。本書は、このようなジレンマに直面する上座仏教の出家者の「教義(律)と実践(出家生活)の複雑で動態的な関係」を、現代ミャンマーを事例として分析した研究である。

出家者による財の取り扱いの問題は、ともすると「宗教とカネ」といったジャーナリスティックなテーマと見られがちであるが、実は世俗とどのような関係を取り結ぶのかという出家者の宗教実践の根幹にかかわる問題である。本書は、出家者が財をどのようにして確保し・保有し・使用するのかという問題に正面から取り組んだ研究として高く評価できる。

本書の構成は、序論(第1章)、第1部(第2～4章)、第2部(第5～7章)、結論(第8章)となっている。序論と結論を除くと、前半の第1部で現代ミャンマーにおける最大の都市ヤンゴンという社会環境を生き抜く出家者の姿を描き、出家の理想と経済的現実の間で生じる諸問題を指摘する。第2部では、近年になって生まれてきた新しいタイプの僧院の事例を取り上げ、第1部で指摘した諸問題に対応しようとするミャンマーの出家者たちの「挑戦」を分析している。

第1章では、サンガ(出家者)と世俗社会(在家者)との関係についての先行研究を両者の相互

補完に注目する「共生モデル」、両者の間にある潜在的な矛盾を指摘する「振り子モデル」、近代化過程における両者の関係の変容を論じる「近代化モデル」として整理し、制度的仏教の周縁で地域ごとの社会的特徴を反映しながら活性化する仏教の姿に着目する「境域」研究の可能性を指摘している。このような先行研究の検討を踏まえて、本書では、世俗権力や公的なサンガ組織によって規定される制度的仏教の外に展開する出家者の律遵守、特に出家生活を維持するための経済倫理に関わる律遵守の実態の分析を試みとする。

第2章では、ミャンマー・サンガの特徴を分析し、それは歴史的にみると世俗権力によって「上から」形成されてきたものであるが、制度的な組織化や管理は限定的で、現在においても、そのまともよりは表層的・形式的なものであるとしている。さらに、ミャンマーでは出家者の教学が重視されるため、若年の比丘が教学僧院を目指して地方から中央へ、「農村」から「都市」へと移動する「教学の巡礼」が顕著にみられ、これが制度的な組織化とは別次元でミャンマー・サンガのつながりと、教学的同質性をもたらしていると指摘している。

第3章では、世俗社会からの経済的支援（布施）の獲得の仕組みについてヤンゴンの僧院を事例として検討している。経済力のある都市に多くの出家者が引き寄せられる結果、在家者の布施をめぐって出家者・僧院が競合状況にあることを指摘し、托鉢や勧進活動、特定の在家者と「檀家」の関係を経るなど、布施を効率よく安定的に調達する出家者側の工夫が詳述されている。またヤンゴンのような都市部では、在家者に対して現世的なサービスを行う出家者よりも、熱心に教学や瞑想修行に専念する、あるいは在家者に対して瞑想や教学の指導をする「出家者らしい出家者」のほうが人気が高いこと、また地縁の関係が薄いとされる都市においても、地区レベルで活動する在家仏教徒組織が僧院経済を支えるセーフティネットとして機能していることが紹介されている。

第4章では、サンガ組織内、僧院内、出家者間での布施された財の所有・管理・使用の現状について記述する。律によって物財の所有や金銭の取り扱いが制限される出家者は、それぞれが在家の

管財人である「浄人」を置くことによって、金銭や財を所有し、使用することができる。このような僧院内の財の管理に関しても出家者は在家者に依存しているのであるが、出家者の多い都市の僧院ではすべての出家者が「浄人」を置けるわけではなく、直接金銭や物品を扱わざるを得ない律違反の状況にしばしば陥る。また出家者自らが携わる僧院の建物や土地の管理の場合にも、譲渡や相続をめぐって様々な問題が生じており、僧院における財の管理には、律が定める出家者の理想と経済的現実の狭間で葛藤が生じていることを指摘している。

第5章では、都市の僧院が直面する問題を克服する試みとして、出家生活の理想を求めて僧院運営の改革を行う運動を取り上げる。ヤンゴンの在家仏教徒組織X協会によって、ヤンゴン郊外に1986年に建設された律厳守と教理教育を実践するX僧院と、その改革の精神に触発されて2002年に建設されたY僧院という二つの僧院は、人里離れた森の中に建てられた「森の僧院」でありながら、都市在家者の間で理想的な僧院として高く評価され、多くの布施を集めることに成功している。著者は、このような「森の教学僧院」といえる新しいタイプの僧院は、在家仏教徒組織とシュエジン派という二つの近代仏教改革運動の結果として生じたものであると分析する。

第6章では、これらの「森の教学僧院」の律遵守の挑戦について、人類学の古典的テーマである「贈与論」との関係から考察を行っている。世俗の社会は贈与に対して返礼があるという贈与と交換の世界であるが、上座仏教の「出家」とはそのような贈与と交換を超えた世界にこそ真の救済があるとされている。しかし世俗社会から経済的支持を得る超俗的な出家の世界は、世俗社会からの取り込み（「土着化」）の危険にさらされているとも指摘する。この新しいタイプの僧院は、ヤンゴンの在家者からの経済的支持を得ながらも、世俗世界との距離を取り、在家者との個人的なかわりを極力回避する行動をとる。著者は、このような社会逃避的な態度こそが世俗世界の真っ只中で〈世俗＝贈与と交換の世界〉の乗り越えを企図するものであると分析している。

第7章では、「森の教学僧院」を事例として、従来のミャンマー・サンガにはない新しい僧院運営の試みとそれが現在直面する問題について分析する。X 僧院では、在家仏教徒組織 X 協会のメンバーからなる僧院管理委員会によって出家者の私有財産や僧院不動産の管理が行われている。「浄人システム」を制度化し僧院全体に適用する僧院管理委員会の存在によって、この僧院の出家者は財の確保・保有・使用に煩わされず、律遵守の理想の出家生活を送っている。しかし、僧院管理委員会という在家者による僧院（出家者組織）の管理は、上座仏教徒社会に広くみられる世俗権力・在家者による出家者の管理（の正当性）という問題を抱えることになるとしている。

結論の第8章では、本書の内容の総括を行い、その上で現代社会における出家者の行方について議論を展開している。スリランカやタイの事例研究において近代化過程の中で伝統的なサンガの権威が弱まり、出家者の役割が周縁化し、在家者の主体的な仏教実践の興隆がみられる「プロテスタント仏教」化が進むという議論に対して、ミャンマーでも近代化過程における仏教改革運動がおこるが、それは出家者の周縁化を進めるのではなく、出家者の存在感の強さが維持される方向で改革が進むとしている。

以上概要を紹介したが、本書は理論的枠組、論文の構成、データを基にした議論のいずれの点においても、熟考された良質の民族誌である。

以下、評者の観点からの評価を述べる。本書全体を通読して強く感じるのは、出家者の視点を通して現代のミャンマーにおける出家生活を真摯に記述しようという著者の姿勢である。上座仏教の人類学的研究は、經典的な仏教理解に敬意を払いつつも、研究対象地域の社会・歴史的状況のなかに埋め込まれた仏教の実態の研究を自らの仕事としてきた。例えば、村落社会における仏教実践、仏教と精霊信仰との関係、世俗権力と仏教サンガ（僧団）との関係、仏教的千年王国運動、近代仏教改革運動、カリスマ修行僧の崇拜、女性修行者と尼僧復興運動、近年の在家者瞑想運動などである。このような人類学的研究では「実践宗教」という掛け声のもと、出家者よりは一般の在家者の宗教

実践に関心を払い、あるいは出家者に注目する場合でも社会動態の中で生じる宗教運動のリーダーとしての役割に焦点を当てるが多かった。その一方で、出家者の日常的実践を取り上げ、出家生活における教義と実践の相克を詳細に分析する研究はほとんどなかった。それゆえ著者が、本書において現代ミャンマーの都市社会を生きる出家者の立場に寄り添い、これまで上座仏教の人類学的研究が等閑視してきた出家者の日常の「挑戦」を描くことができたことは大変すばらしいと思う。

しかし、その一方で本書が出家者の視点にこだわることの制約も感じた。本書では、世俗社会は出家者にとって依存しつつも執着すべきではない世界、取り込まれること（「土着化」すること）で出家生活の理想が危うくなるという潜在的危険を有する「他者」として描かれる。出家生活を支える「浄人」や僧院管理委員会でさえも僧院内の「内なる他者」として描かれる。出家者の視点から見ればそれで正しく、その「他者」や「内なる他者」との緊張関係の分析こそが本書の重要なテーマである。但し、律によって出家と在家が明確に区別されると同時に、出家と在家の循環が顕著なことも上座仏教徒社会の特徴であるとするならば（スリランカは例外である）、僧院に留まらなかった人々たちにとっての出家生活、あるいは在家者にとっての出家生活という「もう一つ」の日常を描くことができる可能性があるように思われる。但しこの点は、出家者から見た「出家生活の民族誌」である本書の価値を減じるものではなく、著者による今後の研究によって補完されるものと考えている。

最後に、本書の重要なトピックでもある僧院不動産の問題について、個人的に興味を持ったので感想を述べておく。出家者による動産（金銭や物財）の所有は評者が調査するタイでも広く認められており、過度な資産の保有はしばしば社会問題として取り上げられるが、僧院（寺院）を個人所有の不動産とすることはない。しかし、ミャンマーでは、僧院は（サンガ所有物となっている場合も多々あるが）個人・組織の不動産として登録することも可能であることを知り大変驚いた。本書で著者が記述するように、特定の比丘に対して布施された僧院用地や建物が比丘個人の所有物と

なりうること、そうして建てられた「自分の僧院」をヤンゴンで持つことが地方出身の比丘の一つのサクセスストーリーとなっていること、個人所有の僧院の所有権は他者に譲渡可能であることなどは、タイでは考えられない。そこで疑問なのであるが、このような世間一般とさほど変わらない僧院不動産の所有形態は、近代的土地（不動産）の所有・登記制度が整備された現代ミャンマーの大都市という特殊な状況下での事例であるのか、それともミャンマー・サンガの伝統として広く認められてきたものなのかが気になった。宗教空間としての僧院（寺院）の性格を検討する上で大変興味深い点である。

（村上忠良・大阪大学大学院言語文化研究科）

久保忠行『難民の人類学——タイ・ビルマ国境のカレンニー難民の移動と定住』清水弘文堂書房，2014，356p.

評者が知る限り、本書は日本語で書かれたものとしては初めてのタイ・ビルマ国境のカレンニー難民についてのエスノグラフィーである。

ビルマのカヤー州を出身とし、タイ北西部のメーホンソーン県に居住するカレンニー難民をとりまく複雑な状況について、長期にわたる現地調査をもとに記述し、考察を試みている。これまで国家による難民管理や国際的な支援の論理から語られてきた当該社会の難民問題について、著者の専門である人類学の立場から当事者の視点に迫っている。これまでアフリカ中心であった難民研究のなかで、タイ・ビルマ国境の難民問題の事例を提供するのみにとどまらず、本書はタイ、ビルマ地域研究においても今後参照されるべき研究となるだろう。

著者の久保忠行氏は、2004年4月から2008年7月までのあいだに、のべ26カ月にわたるタイでの現地調査、そのうち17カ月を難民キャンプのあるメーホンソーン県に滞在し、NGOの支援活動に同行するかたちで5カ所の難民キャンプで調査をおこなった。さらに2009年と2011年にタイにおける追加調査、2012年と2013年には米国およびビルマでの現地調査もおこない、難民キャンプをと

りまく状況だけでなく、その後の米国で第三国定住を選択した人びとや、民政移管後のビルマ帰還の可能性の検討についても視野に入れている。

本書は3部構成で全9章となっている。人類学の通過儀礼の分析概念をアナロジーとして、故郷を離れる移動の経験としての「分離」、難民キャンプでの生活という「過渡」、そして再び国家に包摂される「再統合」という三段階で、カレンニー難民の移動と定住のプロセスを示そうとしている。

「分離」のプロセスを描く「第一部 越境する難民」では、難民研究についての先行研究の整理と自らの視座を提示し（1章）、背景としての多民族国家ビルマとカレンニーをはじめとする少数民族との内戦の歴史的経緯、そして人びとの越境と難民キャンプ形成の歴史プロセスを描く（2章）。そして受け入れ国のタイにおける難民政策と難民キャンプの管理体制を詳述する（3章）。

「第二部 難民として生きる」では、「過渡」としての難民キャンプという生活世界を明らかにする。国家や支援機関の「ケアと管理」の視点ではとらえきれない難民キャンプの生活世界を、その居住空間や日常の営み、キャンプ内外の社会関係を描写することで可視化する（4章）。難民キャンプにおける伝統行事の復興を事例とするキャンプと故郷との連続性についての考察（5章）から、タイ、ビルマのいずれの国家にも属さないカレンニー難民の帰属意識の考察（6章）へと続く。

「再統合」のプロセスについての考察を試みる「第三部 国民国家のなかの難民」では、カレンニーを構成する民族集団のひとつであり「首長族」として知られるカヤンが、タイでの観光業をとおして定住化するプロセスにおけるカヤン女性のエージェンシーについての考察（7章）、難民キャンプから米国への第三国定住を選択した男性の事例による越境の民族誌の試み（8章）、そして最後にビルマの民政移管後の難民の帰還をめぐる状況についての考察で締めくくる（9章）。

ビルマ・タイ国境社会の研究に対する本書の功績として以下の3点を挙げたい。

第一に、タイ・ビルマ国境の難民キャンプ内部の日常を、参与観察によって可視化してみせた点である。その居住空間、季節労働者としての農園